

城戸照彦さん(66)

ベトナムで枯れ葉剤被害児を支援する



1953年、横浜市生まれ。金沢大大学院修了後、金沢医科大助教授などを経て、97年から金沢大医学部教授。今春から同大客員教授。専門は公衆衛生学。ベトナムには30回以上渡航し、「海岸沿いの朝日が印象的です」。

「汚染された環境は土壌を入れ替えれば改善するが、人の健康は一旦失うと回復しない。環境が良くなっても長期間、住民の健康状態を見ないといけない。負の遺産をきちんと継承しなければと感じた」と話す。

イタイイタイ病と違って梯川の場合は因果関係などを明らかにする裁判が行われなかったため、金銭的な補償はほとんど得られなかった。約30年間、自身も健診に関わったが、根本的な治療法はなく限界を感じるが多かったという。

ベトナムでの健康被害について、「公害と戦争は違うかもしれないが、戦争は環境破壊の最たるものだ」と指摘する。ともに目に見えず、世代を超えて悪影響を与えるという共通点から、ベトナムでは日本が経験した原爆による放射線被害に共感を持つ人も多いという。「ダイオキシン類による健康被害に対する根本的な治療法はまだないが、症状を改善するような研究成果も少しずつ出ている。そういうものを試しながらベトナムの人たちの役に立ちたい」と力を込めた。

【阿部弘賢】

世代超える汚染に挑む

ベトナム戦争(1960〜75年)中に米軍が散布した枯れ葉剤に含まれるダイオキシン類の

的支援プロジェクトに取り組む。2001年度に始めたベトナムの成長や発達につなげた

い」と話す。

汚染地域で、住民の健康被害について約20年にわたって研究してきた。金沢大を定年退職した今年、JICA(国際協力機構)とタッグを組んで、子供を始めとする地域住民や医療関係者を対象に健康改善に向けた実践

ムでの追跡調査で浮かび上がったのは、汚染の影響が世代を超えて人の健康に被害を及ぼしている可能性だった。研究分野では一定の貢献を果たした自負を感じている一方、調査対象が限定されていたため、成果を協力地域にはほとんど還元できなかった思いが残る。プロジェクトでは医療関係者の人材育成やダイオキシン濃度の高い母乳を飲んだ低体重児を特定し、母子への栄養指導を行える体制整

障害は時間がたっても改善しないことを突き止めた。「汚染された環境は土壌を入れ替えれば改善するが、人の健康は一旦失うと回復しない。環境が良くなっても長期間、住民の健康状態を見ないといけない。負の遺産をきちんと継承しなければと感じた」と話す。

北陸ひと模様

